

コロンビア関係図書案内

桜井 敏浩

日本語で書かれたコロンビアのみに関する図書は、コロンビアの生んだノーベル文学賞作家ガルシア＝マルケスの小説等の翻訳・評論を別にすれば極めて少ない。

『[新版] ラテンアメリカを知る事典』(平凡社 2013年)には関連する項目がいくつか載っており、植民地時代以降の歴史については、『概説ラテンアメリカ史』国本伊代(新評論 2001年)の中でコロンビアははじめ南米の独立について言及されている。そのきっかけを作った英雄の軍人、政治家、思想家としての行動と思想はまず基礎知識として知っておきたい。

『シモン・ボリーバルーラテンアメリカ独立の父』

神代 修 行路社 2001年 216頁 2,400円+税

現在のベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの5か国をスペイン支配から独立させた英雄の軍人、を詳述した評伝。ほかに『シモン・ボリーバルーラテンアメリカ解放者の人と思想』J.L.サルセド＝バスタルド著 水野一監訳 上智大学イベロアメリカ研究所訳 2008年 530頁)も出ている。

コロンビアに限定した総合的な解説としては、次が広くコロンビアの姿を紹介していて分かりやすい。

『コロンビアを知るための60章』

二村 久則編著 明石書店 2011年 388頁 2,000円

内戦、暴力、麻薬戦争による治安の悪い国という、これまでの偏ったイメージをもたれている国について、出来るだけ全体像を紹介しようという意欲に満ちた総合的な解説書。

自然と資源、歴史、現代史、内戦と暴力についてまでを33の章で概説している。

コロンビア現代史は、政治的、あるいは麻薬をめぐる暴力(バイオレンシア)の横行であった。つい十年程前まで続いたこの悲惨な実情から目を背けることはできない。しかしながら、それはウリベ政権(2002年～10年)以前のことであって、現在のコロンビアは政治や麻薬に関わる無差別な暴力が一般的だった時に比べれば、治安は格段に改善されていることを知らねばならない。

『バイオレンシアの政治社会史ー若き国コロンビアの悪魔払い』

寺澤 辰麿 アジア経済研究所 2011年 299頁 1,500円+税

著者は2007年から10年の間在コロンビア大使を務めた。政治史、社会史の両面から二大政党対立時の政治的バイオレンシア、ゲリラとの戦争、麻薬戦争および一般犯罪による暴力横行を分析し、これまでのバイオレンシアの時代でも、ハイパーインフレ、債務不履行を起こすことなく経済は健全に運営され、ポピュリスト政治家が出てくることなく一貫して民主主義が行われてきた国であることを明らかにしている。

『コロンビア内戦：ゲリラと麻薬と殺戮と』

伊高浩昭 論創社 2003年 341頁 2,500円+税

元共同通信記者によるコロンビアのバイオレンシア、麻薬問題、日常化された殺戮などの取材レポート。ゲリラ、準軍事組織(パラミリタール)、麻薬組織間の殺戮を、歴史、地域格差、政治構造等から解説している。

『ママンへの手紙ーコロンビアのジャングルに囚われて』

メラニー・デロー＝ベタンクール／ロレンソ・デロー＝ベタンクール 三好信子訳・解説 新曜社 2009年7月 187頁 2,400円

2002年の大統領選挙に立候補することを決意したイングリッド・ベタンクール下院議員が地方遊説中に誘拐され、以後6年4ヶ月の間ジャングルで囚われて生死も定かでなかったが、07年にFARCゲリラの指示で母宛ての手紙を書くことを命じられ、これが他の人質達の手紙やビデオとともに警察に押収され、08年コロンビア軍が彼女ほかの人質を劇的に救出した。

この手紙全文を中心に、訳者が現代のバイオレンシアや救出運動、解放後の講演等の活動を付け加えたもの。彼女が立候補した時に出した『それでも私は腐敗と闘う』(永田千奈訳 草思社 2002年)が既に出ている。

『顔のない軍隊』

エベリオ・ロセーロ 八重樫克彦・八重樫由貴子訳 作品社 2011年2月 238頁 2,200円+税

大土地所有制による搾取に反抗した農民武装自衛運動から始まった左翼ゲリラに対して、大地主層を支持基盤とする右派自衛団パラミリタール、コカイン売買で巨利を貪る麻薬組織と政府軍で四つ巴になり繰り返す暴力 Violencia に蹂躪される山間の村の人々を描いた小説。

『ボーイ・キルズ・マン』

マット・ワイマン 長友恵子訳 鈴木出版 277 頁 2007 年 5 月 1,600 円+税

伝説的な首領パブロ・エスコバルをはじめ、麻薬カルテルが猛威を振るったメデジン市では、少年たちが暴力に頼る悪のビジネスの手先として、安易に稼げる殺し屋の道にいと簡単に入っていく。貧困、犯罪、テロ、麻薬の世界を少年の目線で語った児童文学。

『サヨナラ ―自ら娼婦となった少女』

ラウラ・レストレーボ 松本楚子、サンドラ・モラーレス・ムニョス訳 現代企画室 2010 年 488 頁 3,000 円+税

コロンビアの女流作家によるノンフィクションと歴史が入り混じった独特の文体による小説。マグダレナ川沿いの石油掘削の基地トーラ（バランカベルメがモデル）近くで、異邦人の面影をもつ少女は日本語のサヨナラという名で人気を集める。焦熱の石油採掘最前線の町に、ともに極限の生活の日々を過ごす娼婦と労働者たち。サヨナラの姿は、外資企業の搾取、軍やゲリラによるビオレンシアの横行、社会の混乱の中で安定した平和を模索するコロンビアの実情が重なる。

コロンビアの伝統的な輸出産品として一般に知られているのは、なんといってもコーヒーだが、コーヒーをコロンビアだけではなく世界的な視野で分かりやすく解説したものとして次の本がある。

『コーヒーのグローバル・ヒストリー 赤いダイヤか、黒い悪魔か』

小澤 卓也 ミネルヴァ書房 2010 年 2 月 332 頁 3,000 円+税

コロンビア有数の輸出産品であるコーヒーの歴史、輸出農産品としての特色、生産様式により大きく変わる品質や市場価値、収穫・精製・焙煎の重要な要素などを解説し、コロンビア、コスタリカ、ブラジルを主に、中米、アジアなどで大きくなったコーヒー産業がラテンアメリカの近代化にどのような影響を及ぼしてきたかを明らかにしている。

コロンビアへの日本人移住は、近隣のブラジルやペルーに比べると極めて少ないが、それでも農業その他の分野でコロンビア社会に貢献している日系社会がある。

『黄金郷を求めて ―日本人コロンビア移住史』

イネス・サンミゲル 加藤 薫編・訳 野田典子訳 神奈川大学出版会（発行）丸善出版（発売）2014 年 2 月 196 頁 2,000 円+税

コロンビアで生まれ、日本で日本文化研究を行ってきた著者がフィールドワークと文献調査から纏めた日本人移住史だが、これまでの日本人の移住史が日本人移民とその子孫、日

系団体の記録が中心であったのに対し、第三者的視点から検証し、国策移民会社等の支援を受けた移民だけでなく、自力で定住した移民も対等に取り上げ、日本移民によってコロンビアが受けた恩恵、日系コロンビア人の新たなアイデンティティにまで言及。

『空とぶ絵師 ―アンデスから雲にのって』

竹久 野生 オフィスK 2011 年 4 月 215 頁 1,800 円+税

1968 年コロンビアに造園家の夫とともに移住し、以後ボゴタ市に在住している画家の旅日記。コロンビアに住んでいなければ行かない地方の様子が語られている。

『エメラルド王』

早田 英志・釣崎 清隆 新潮社 2011 年 6 月 255 頁 1,600 円+税

エメラルドの原石を買い付け、コロンビア有数の大手エメラルド輸出者になったという自伝を、写真家釣崎が取材して纏めたもの。早田の半生を描いた自伝『エメラルド・カウボーイズ』（PHP 研究所 1986 年）に続くもので、自伝はとかく自分の生き様の美化や自己正当化が付きものだが、エメラルドの採掘、原石売買、鉱山利権や組合の利害をめぐる抗争、もはや政治的理念とは離れた犯罪集団と化したゲリラ勢力や対する自衛組織パラミリタリーをはじめ私兵や政府軍の暴力の応酬、腐敗した政府組織などの中で、外国人である早田が幾多の困難を乗り越えてエメラルド商売でのし上がっていく姿を綴った冒険ドキュメンタリーとして読めば面白い。

（本紹介は 21 世紀になって以降出版されたもののみを対象としており、冒頭の 4 点と『コーヒーのグローバル・ヒストリー』を除きコロンビアがその一部として取り上げられているラテンアメリカ研究書等是不含まない。また、ガルシア＝マルケスに関わる訳書、評論・解説等は割愛している。ここに挙げたほとんどの図書のより詳しい紹介文が、ラテンアメリカ協会の Web サイトの「関連情報」→「図書案内」に収録されている。）